

茶色の眼



林 芙美子 著

茶色の眼

茶色の眼

定價二百三十圓

昭和廿五年十二月廿五月初版發行
昭和廿六年七月十五日二版發行

著者 林 芙美子

發行者 杉山胤太郎
東京都千代田區有樂町二ノ三
朝日新聞社

印刷者 川口芳太郎
東京都港區芝三田豐岡町八
圖書印刷株式會社

發行所 朝日新聞社
東京都丸之内・大阪市中・島・小倉市砂津

(電話丸ノ内三・北溜三・小倉三六二)

茶
色
の
眼

林
芙
美
子

裝
幀
·
木
村
忠

私はね、夫婦ってものを信用しませんのよと云うのが、美種子夫人の口癖であつた。世間の男と云うのはまるで雄鶏みたいなもので、氣心のあつたいゝ伴侶である妻君のほかに、氣心なんかどうでもいゝ女をみつけたがるものなの……。美種子夫人は誰の前でもかまわずにこんなことを云い出して、良人の中川十一氏に對して、ちくりちくりと昔の古創に針を射すようなことを云うのであつた。

中川夫妻は結婚をしてもう十四年になる。子供はなかつた。

美種子夫人は十人並の美人で、氣位の高い女だったので、中川氏は結婚後間もなく、あしまったとは思つたけれども、その氣位の高さは、長い將來の間には、何とか自分に同化してみせる事も出来るであらうとたかをくくっていた。だが、人間の心と云うものは、

仲々一朝一夕では叩きなおすと云うわけにはゆかない。

中川夫妻は見合結婚であった。

仲人の野間氏の應接間では始めて、中川十一は新村美種子を紹介された。野間氏の應接間は、支那風な飾りつけで、螺鈿のきらきらした屏風が壁間に立ててあった。美種子は、その螺鈿の屏風を背景にして、紫檀の椅子に腰をかけていた。そのそばに、末の妹だと云う八ツになる良美^{よしみ}が猫を抱いて遊んでいた。二十七歳の中川十一は、こうした美しい眺めをみて、女の心なぞの事は少しも考えてみるよゆうはなかった。

美種子は鶯色の絹の洋服を着ていた。正面をむいていたので、あごの張っているのは氣がつかなかった。鼻つきが何ともすっきりしてかっこうがいい。中川十一は、美種子の鼻ばかりみつめていたような氣がした。眼は、大きかったが、あとで氣がついたのだけれども、珍しくはつきりした茶色の眼玉で、大昔の何人種かのミックスされた眼の色ではないかと、中川十一はこの茶色の眼も薄情そうだなと思った。パセドウ氏病と云うのに、よく茶色の眼玉の飛び出したのがある。

結婚して、四五日は、中川十一は、妻の眼をみつめるよゆうはなかった。何しろ、夢中の世界をさまようているような、若い中川氏には、醫者のような冷い眼で妻の顔をみつめ

る力はない。螺鈿の屏風と云うものが、貝の肌を、青や桃色にびかびか光らせて黒うるしのバックの中から反射しているので、茶色の眼玉などには氣がつかないしくみになっている。

猫を抱いている末の妹の良美は、まるで西洋人形のようにあどけない圓ぼちゃの顔で、中川十一氏を見るなり、深いえくぼのある顔で、人おじする様子もなくにこりと笑った。中川十一は、その良美のあどけなさに非常な好意を持った。

仲人の野間夫人は、窓ぎわに腰をかけていたが、この夫人は二十貫と云う肥大した軀つきが小柄であるだけに醜惡そのものであった。顔も澁紙色であるせいか、この夫人のそばにはどんな女性を連れて來てもたしかに美人にはみえるに違いない。夫人のそばには、野間彦六氏が椅子に腰をかけている。鉛筆と云うあだ名があるほど、痩せて、背が高い。

美種子は、黙ってしっかりした眼差しで、中川十一をみつめていた。時々、大きい眼をばちばちとまたきしているの、中川十一の視線は、すっきりした鼻のところとぐまってしまう。唇には紅がうっすりといっていたので、中川十一は何となく美種子を貴族的な女のように思った。肌は白く、Vの字にあけた胸のあたりが、ぼおっと桃色の血の氣をみせて惱ましい感じだった。

中川十一は、それでも、別に、この女を是非貰わなければならぬと云うほどの氣にもな
ってはいなかったけれども、美種子姉妹が先きに歸る事になって、野間夫妻と中川が玄關
へ出て行った時に、美種子の栗色のハンドバッグの横に岩波文庫が一冊のっかっていた。
美種子が靴をはく間、そっと、中川十一はその岩波文庫の表題を見た。海邊の悲劇、バル
ザック。ぽう、これは仲々の文學好きな女なのだと、それだったら、もう少し、話も
そんなところへ持って行くべきだったと、急に、靴の紐を結んでゐる美種子の肩つきのな
だらかな線に、中川十一は熱情的な眼をやった。ともぎれのバンドで腰の線が區切れてい
る。むっくりとしたお尻の圓味がまだ少女らしい。年は十九だと云っていたけれども、海
邊の悲劇を読むあたりは、たんげいすべからざる何かを心の中に持っているに違いない。
中川十一は急に、新村美種子を貰う決心がついた。十日もたない間に、中川十一と、
新村美種子の結婚話はまとまってゆき、昭和九年の十月末に中川十一と新村美種子は結婚
式を挙げた。

考えてみると、十四年と云う歳月は、あの結婚式の日から、まるで夢のように過ぎたも
のだと美種子夫人は思った。十四年の間に、まる十年と云うものは戦争であけくれしてい
た。十二年七月のロコークウ一發の事件からこのかた、ずっと戦争つゞきで、庶民の生

活の中にも、この戦争を考えないではどうしても暮してはゆけない、まことにむずかしい十年間の厭な時代をくぐって來たのである。戦争と云うものの辛さ厭さを、今度位、日本人の一人一人が考えた事はあるまいと思える。美種子夫人も、この戦争に就いては數々の恨みがあった。次の弟の彌一郎をビルマで戦死させてしまった事。その次の妹の妙子がやはり良人に戦死されて、六ツになる啄次を連れて實家へ戻って來た事。末の妹の良美が、學徒動員なんかの反動でもって、何となく不良じみて來た事。それから、最も心に痛手を受けた事は、中川十一に自分以外の女が出來た事である。

こうした事件はみんな戦争のなせるわざなのだと、美種子夫人はきもに銘じて、この十幾年間かの不幸さをかこつのである。

今日も中川十一が會社へ出て行つたあと、内職の編物を擴げて、いざ仕事にかゝろうとしている時に、二階から縁側に水がぽとぽとこぼれ始めた。

「あら、またやつてゐるわ。あれほど固く斷つてあるのに、なんて圖々しいおばあちゃんなんだろう……」

美種子夫人は暫くじいっと縁側に降つて來る水滴を見つめていた。二萬圓の札束がふつと頭に浮んで來る。二萬圓の立ちのき料さえあれば出て貰えるものを、このごろ部屋代も

とらはいで只で貸しているようなのが癪にさわって来る。

「松山さん！　またお洗濯ですか？　水がこぼれていますけど……本當に困りますわ、大變な水ですよッ」

美種子夫人は疳高い聲で縁側から二階の方へ向いて呶鳴った。二階は森閑としてしまつた。美種子夫人は思い切つて、二階の梯子段の上まで上って行つた。一目で見える廊下で、松山榮子のお母さんが、尻からげをして、雑巾がけをしていた。

「どうなすつたんですの？　水がいっぱいこぼれておりますけれど……」

「どうも濟みません。いま、一寸、馬穴の水を引っくりかえしたものですから……」

榮子のお母さんは、四ツン這いになったまゝ龜の子のように、顔だけを梯子段の方へむけて云つた。

すると障子ぎわのところに、にゅつと松山浩久氏が立つて來て、

「いま、階下に拭かせに行きます」

と、小さい聲でぽつりと云つた。

美種子夫人は、何となくいまいまして仕方がない。働きもないくせに大きな事を云つて、只、ぶらぶらと暮している……。いくら兵隊から戻つて來て、世の中が空々漠々だと

は云つても、復員して一年にもなると云うのに、まるで、この戦争の不幸を自分獨りで背負っているかのような一種のスタイルは、現實派の美種子夫人には許しておけない事であった。

もともと、この二階を松山の一家に貸したのは美種子夫人である。――女學校時代の友人で、櫻井節子と云う仲のいい友人の紹介だけれど、同じ女學校の下級生だと云う松山榮子を彼女が連れて來たのだ。良人の松山浩久氏はシベリヤからいまだに帰って來ないので、田舎に何時までも引っこんで無爲徒食では暮してゆけない。それでまア、東京へ戻って、何とか良人の戻って來るまでは自活してゆきたいのだそうであるけれども、何とか、是非、お二階の間を拜借願えないでしょうかと云う相談であった。美しいひとではなかったが、如何にも女らしい地味なつくりが美種子夫人の氣に入つた。どうせ二階の間は空いているのだから貸してもかまわないけれども、どんな固い人との間でも、空手形の信用すくではもしもの事があつてはどうにも手遅れであろうからと、美種子は、節子に保證に立つて貰つて、松山榮子の良人が戻つて來るまでと云う期限つきで二階の八疊を貸す事にした。

中川十一の家は、野間さんの借家であつたのを、終戦直後安く手に入れたもので、二階が八疊、四疊半の二間、階下が、六疊に四疊半二間の古い割合木口のいい家であつた。

二階の四疊半には美術學校の生徒で、谷村忠と云う青年が野間さんの紹介で下宿をしている。下宿と云っても一切自炊はお斷りと云う條件なので、谷村君は、雨が降っても照つても外食券食堂の御厄介にならなければならぬ。

中川家の小さい古びた煉瓦の門には、中川十一と云う門札の下に、谷村忠とグリーンの油繪の具で書きなぐった大きい板ぎれと、松山榮と印刷された名刺とが一國一城の主あかじの如くよりそつて張り出されている。

松山榮さかき子が引越して來たのは、美種子が紹介されて四日目位であつたろうか、榮子が荷物もののほかに母親を連れて來たのには美種子は意外な氣がした。話のむきは、母親なぞと云うものはおくびにも出なかつたからである。母親は、榮子の實の母で、少々耳が遠いらしく、二階で荷ほどきをしている榮子の聲が馬鹿に疳高いので、美種子は突拔けに聞える二階の聲を一切合切耳にする事が出來た。

「とても素晴らしい眺めね」

と、榮子が母に話している。實際、中川の家は見晴しのいゝ家で、崖の上にあつたので、速く新宿の伊勢丹あたりの建物まで望む事が出來た。このあたりは、目白でも焼け残りの

一かくをなして、多少の住宅街らしいおもむきがあった。

榮子は會社勤めをしている様子であつたが、その會社も、朝早くから出て行く必要もないところとみえて、晝近くになつてから、榮子は家を出て行つた。

「何處へお勤め？」

美種子が何氣なく聞いた。榮子は一寸どぎまぎした様子だったが、只、銀座の商店で、朝が遅くて、夜も遅いのだと云うだけで、あまりくわしい事は云わなかった。女人の収入で親子で食べてゆくには仲々の辛い世の中である。中川十一は榮子に同情して、「君なんか、社會がどうの、政治が悪いのと、生意氣な事ばかり云っているけれども、榮子さんなんかの事を考えたら、とてもとても幸福な身分だぜ……。いくら働きがあるか知らんが、あの痩せ腕で、兎に角、おふくろを食わしているんだからね」

晩餐の折なぞ、時々こんな事を云つた。中川十一は、肚の中で、どうも、俺は、あの時のバルザックにだまされてしまったと云う氣がしていたのである。バルザックと、美種子の茶色の眼は、中川氏にとってはどうも宿命のような氣がしてならない。

「あら、私が、何時、生意氣な事を云って？ 社會が悪いから社會が悪いと云うのよ。浮浪兒だの、かっぱらいだの、強盜だの、それに政治家だって悪い事ばかりしてゐるじゃあ

「ませんか……さんさん人を殺しておいたくせに、何の責任も負わない政府って憎んでいいないかしら……」

「そりゃア憎んでいいさ。憎んでいいけれどだね。榮子さんのような生活もまた仲々涙ぐましいと思わないかね？」

「まア！ どうして涙ぐましいんですの？ 貴方、榮子さんに馬鹿に同情なすっていらっしゃるのね。良美が云ってたわ、兄さんは多情佛心だって、あれで金さえ持たせたら何をやり出すかしないって……女のひとと、みると、貴方はすぐ同情なさるのよ。良美の問題だって、少しも、貴方は叱って下さる事をなさらないで、御自分だけいい子になっていらっしゃるのよ。そうじゃアありませんか。私以外の女に對しては、貴方って方は、馬鹿に御親切なんですから……」

「親切じゃアないさ……別に親切にしてるとは思わないけれども……」

「思わないけれども、どうなんですか？」

いつも、こうした話のあとは妙な雰圍氣になつてしまふ。

中川十一は仕方がないから、そばにある新聞をひろつて眼をとおしてみる。もう、さつきから、幾度も讀み返しているの、何々氏當選か？ と云うような活字のそばに黄いろい

しみのあるのまでおぼえていることになる。藥の廣告、本の廣告、そうしたものをずらりとまたむしかえして眼に通してみる。

榮子が銀座裏のバーに出ているらしいと云う事を知ったのは、榮子が引越して來て、二カ月あまりしてからであつた。それも、美術學生の谷村忠君の報告で美種子は始めて知つたのである。

美種子夫人は吃驚してしまった。

バーに働いている女とはどうしても考えられない。割合背の高い、眉毛の薄い、貧血のような顔色をした地味な榮子が、銀座裏のバーに働いていると云う事が不思議だつた。

「まア、谷村さん、それ、本當なの？ 嘘でしょ？ まさか、あなた、あんな地味な、田舎の先生みたいな榮子さんがさ、バーの女給してるなんて變だわ……私、信じられない事よ」

「ところが、僕が、この眼で見たんですよ。始めは違ふ人だと思つたんだけど、どうも似てるンでバーのボーイに聞いたらそうだって云うンで驚いちゃつた。とても、すっきりした美人に化けてるンですよ。眉を描いちゃつて、つけまつ毛をしてね。まるで、マナロイみたいな色っぽさになつちやつてるんだ。家へ戻る時は、あの化粧をすっかり落して戻る

ンですね……」

谷村忠君はアルバイトで、この頃、看板屋の仕事を手傳っていた。榮子のバーへ行ったのも、看板の仕事で、もうじきやって来るクリスマスの飾りを頼まれて、四五人の美術學校の連中と働きに行ったのであった。

「へえ、七不思議ね。女ジキルとハイドだね。そんなに變貌出来るものかしら……」

「いや、兎に角綺麗でしたよ。黒いイーヴニングなんか着ちゃって、メッキか何か知らないけど、金の細い腕環をしてるのが意氣でしたね。髪はばあっと肩にたらしちゃって、脚を組んで煙草を吸ってるとこなンか、奥さんに見せたい位だ」

「まア！ でも、榮子さんは、あなた、煙草は吸わないひとよ。變じゃない？ 本當に見たの？」

「向うは僕の事なンか知りヤアしないンですよ。何處かの看板屋が來てる位のもンでしよ
う」

その夜、中川十一氏が戻って來るなり、美種子夫人は、谷村忠君の話を細大もらさず報告をした。

「私、狐につまゝれたみたいだわ。あのひとクリスチャンで、以前は小學校の代用教員も